



「昭和のワンダーランド そして平成へ。浅草いまむかし」

「92歳の現役フォト記者が発刊『浅草いまむかし』」

中森 康友 カメラをかき戦

後の荒廃した東京の庶民の暮らしや世相を取材して歩いたジャーナリストが、フォトエッセイ『昭和のワンダーランド』そして平成へ、浅草いまむかし

し(A4判、1512円)税込み、TEM出版書店)を刊行して話題に。著者は渋谷高氏で92歳の現役フォトジャーナリスト。昭和20年代の浅草に通い続けて、焼け跡から復興する行楽地を当時と現代の写真を比較し、鮮やかなタッチで70年間の変遷を紹介する。

「往時の浅草には何となく吸い込まれていかれそうな空気が漂っていた。人ごみ、お参り、におい、色彩など独特な雰囲気があり足が向いた」と巻頭で書いている。戦後すぐの

浅草寺境内は、戦災で寺の面影がなく、自転車を荷台に乗せた一台の焼き芋の屋台や、板囲いの小屋に「人民理髪所」とすこみのある看板。朝から囲碁将棋で愛(こ)さを晴らす大人たち。そのそばで駆け回る子どもたちの歓声…。

繁華街の浅草六区は映画館や演芸場が復活。人気の「ロック座」の楽屋で、取材中に「偶然に大作家の永井荷風先生とお会いしましたが、踊り子たちに囲まれ楽しんでおりました」と渋谷氏。演芸場では浅草

一の女優で座長の大江美智子や、「フランス座の若手芸人である海美清、ビートたけしが注目された。昭和24年ごろには桜の木がなかった墨田公園の土手も、今はお花見の名所に。戦後70年がたつと趣が一変し、昔の食へ歩きが今は歩き食へに。江戸時代からのおでんぶらや寿司などはあまり売れず、すしや通りにには寿司屋が3軒のみ。老舗で2000円の天丼店に行行列が続く」と今様「浅草」を解説する。

渋谷氏は1925年生まれ、現役フォトジャーナリスト。日本大学芸術学部を卒業し、新聞や雑誌のグラビア撮影で頭角を現し、旅取材や釣り取材などでマルチに活躍する。昭和20年代から撮影した秘蔵写真は約3万枚。浅

草